

論理から見た日本語

36期生

I テーマ設定の理由

講談社現代新書の次は何を読もうかなあと、ずらりと並んだたなの前で、ふと手にとって見た一冊の文献が、結局この自由研究をしようと思ったきっかけになる。書名は、「日本語と論理～その有効な表現法～」というもので、論理とは具体的にいつてどういものなのかという素朴な疑問に始まった分けである。

一体、論理とは単に「筋道を通る」ということのみでいいのか。

第二の理由は、「日本語観」として現在いろいろな本が出されたり論じられたりしているわけだが、そのほとんどが、語彙、発音、文法等のいわゆる、範囲の広い「言語学」のまとまりの中から選ばれたテーマによるもので、“論理を背景にして”“論理から観て”といったものは意外に少ないのではないか。

以上の理由から、この際、文献をもとに、簡単でもいいから、論理という観点からみた日本語とはどういうものかを、自分なりに考察してみようと思ったのである。

II 研究方法〈構成〉

まずは、文献使用ということだが、次の三つの事柄を大きなテーマとして構成する。

1. 論理とは…主に論理というものの表現から→本題に入るのに少なくとも心得ておかななくてはならないと思われる事項を調べる。
2. 言語学から観た日本語…主に文法、語彙、音韻など→ここでは一般的に観られている日本語の特徴、傾向についての把握を目的とした。
3. 論理から観た日本語《本題》…その文体観から具体的には「は」と「が」の比較等、最終的に、「非論理性」の検討によりその論理性について考察する。

〔応用編〕		
① 論理とは ア. 論理とは イ. 「考える」ことの意味 ウ. 論理の現れ方 エ. ことばの中の論理 オ. 簡単な論理学の実際	② 言語学より ア. 特徴ショートショート イ. 発音 ウ. 語彙 エ. 敬語～その存在的価値	③ 日本語と論理 イ. 非論理性と日本語、論例 キ. 言い廻しの内にひそむ日本人の論理 ウ. 日本語の文法構造と論理性 エ. 「は」と「が」について
〔知識編〕		
結論; ◎その論理性とは《主に「非論理性」ということの意味に対して》		

Ⅲ 研究内容

実際に調べた内容は、前頁の表の通りだが、ここでは敢てその一つ一つを説明することにはせず、部分的にかいつまんだ内容を紹介していきたいと思う。

①論理とは

ア⇒論理とはズバリこれだ。と言い切るのは難しい。私が参考にした幾冊かの本によっても大なり小なり異なる点はいろいろあった。ただそれらの中にもやはり共通点だと考えられる箇所が見受けられる。まとめてみると次のようになるであろうか。

●私達の感情や気持ちを正しい方向に流していく運河にあたるのが考え方のすじみちである論理である。●考え方にはっきりした筋を通すこと、それが論理といわれるものの働きである。●論理的に考えるとは考え方をつなげる鎖を、はっきりつかみながら考えることである。●前提と結論の間には変えるわけにはいかない一定の関連があつて、これが論理というものであり論理における一致というものである。

この章をまとめると、「考える」ことの一例、知覚による判断「思い浮かべる」こととことばとの密接的関係（ことばに従つてものを考える）。そして論理の現れる状況としてはまず第一に、説明のつじつまが合っていないという感じであるということができそこで対応する正しい推論がまさに論理だということである。

結局本題と結びつきがあるのはエの“ことばの中の論理、であるわけだが身近な例を挙げるとその中心は接続詞であるといつてよい。つまり論理から見れば文章に現れる文と文との結びつきが重要になるわけである。

結びつき：強	
【前提→結論の関係を示す語】 接続詞……したがって それで それゆえ だから ゆえに よって 接続を表す助詞……から ので	⇒いずれも理由を述べるが因果関係を前提する
結びつき：弱	
【結びつけられた文、そして全体の文章に「はい」と答えられる語】 接続詞……および が かつ けれど さらに しかし すると また そこで そのうえ それから つぎに ところが なお ならびに 助詞……が と て けれど し のにも や 用語・助動詞の連用中止法……鳥が鳴き、花が咲く。 文や語をただ並べる……鳥が鳴く。花が咲く。 米・味噌・醤油。 【少なくとも一方に「はい」と答えられる語】 接続詞……または あるいは 助詞……か	⇒私は本屋で本を買った。 ②③④、隣の文房具屋で、ノートを買った。 本かノートは？ ⑤⑥、どちらも。 ⑦⑧、本が。 ⇒本が、あれ⑨
【条件を表す語】 接続詞……さすれば そうならば 助詞……ば「だ」の仮定形……なら	
【否定を示す語】 助動詞……ない ぬ(ん) ず 形容詞……ない	⇒答え方(はいいいえ)を逆にさせる働き

②言語学より

前にも述べたように、この章では、一般に観られている日本語というものの特徴を、テーマとしたわけだが、その一つ一つが非常に興味深いものであり、内容も奥深く掘り下げていけば、それ一つで充分研究に値するものばかりであった。特に個々で抜粋した発音、そして語彙は、資料も豊富で、内容も一応にまとまったのだが、あくまでも「知識編」ということで、省略することにし、ここでは至極簡単に、まとめることに留めておきたいと思う。

1. まず名詞にしても動詞にしても格変化を持たない膠着語である。(それら格に当たるものは「が・の・に・を・と・」といった助詞によって表現される)
 2. 音韻組織は非常に簡単で、拍(音節)と拍との切れ目がはっきりしており、その種類は少ない。加えて開音節という母音で終わる音節をもつのも日本語の特色である。
 3. 単純な音韻の組織によって、単語は一般に長く、また不安定(形が定まらない、例えば人・ひと・ヒト等)である。
 4. ヤマトコトバ(日本語本来の語彙)に加えて漢字関係の外来語が多い。同音・同義語多数。
 5. 相手の地位や関係などによって変化する^{こうちやく}相対敬語、の特異な発達。 etc.
- ◀ 言語というものは不毛の議論である。そのそのことばではそう言うことになっているのだから断乎としてそう言うことを要求しているもの—それが言語である。

③日本語と論理

イ、言い廻しの内にひそむ日本人の論理 (アについては後に結論と関連させて使用)

これはある種の日本語から見た日本人の論理や心理を探ってみるということで、最終課題；文法構造へ入る前の糸口 として取り上げたテーマである。

例 「○○さんの言葉じゃないが、人生は一行のボードレールにもしかなない。」
こういった言い廻しはよく口にされるが、よく注意してみると論理的にまったく矛盾しているということに気付く。そこでこの種の表現の由来をみると→タブーの世界つまり「我が身じゃないが、といったまじないの言葉がそれとみられるとあった。類する表現としては「言っちゃあ悪いけど…」「自慢じゃないが…」習慣に密接したもので「誠に失礼ですが…」「こんなこと言えた柄じゃないんですが…」「お言葉を返すようですが…」等々。これらには何か責任回避をするような心理が見受けられることに、自と気付くだろう。

他に取り上げた言葉としては 大体次のようなものである。

言葉	使用例	論理・心理
なまじ	なまじ親切心を出すと後でひどい目に会うぞ	→多値的な物差し、処生訓。
れる・られる	考えられる・思われる・感じられる	→自発、 ² 夢想、に近い感。
なる	～になる、～となる (すると並行)	→自発、意志に関係なく 起きる自然事態の観念。

◎日本語があいまいであるとの評を受ける理由の一つは、**圓**のような表現が多い為に話し手の目的・意図がわからないという印象を相手に与える点にあるようだ。★何気なく使っている言葉の奥底にも日本人独特の論理や心理が秘められていることを改めて考えさせられた。

ウ.日本語の文法構造と論理性…中でも特徴的なものを、順を追って説明したいと思う。

◎〈主語〉の影が非常に薄い

- (1)春が来る→陳述の語気
 - (2)Spring comes…春,それが来る
- } 日本文法(述語の一立立て) といえる
} 英文法(主語・述語の二本立立て)

日本語の主語は、実は主格補語で、目的格補語や格助詞がついた名詞と対等に並ぶにすぎない。

◎Aの語句がBの語句に従属しているとすれば、Aは常にBの先に立つ(文末決定制)

- ex.1 花の一種であり
 - ex.2 「咲く」の一種
 - ex.3 「いる」の一種。
- 白い花⇒「白い」の一種 | 美しく咲く⇒「庭で咲く」 | 咲いている⇒「咲いて」の一種
- 従属 ではない | 従属 も同様 | 従属 ではない。

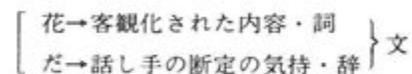
これが英語の場合だと、対する述語は主語のすぐ次に現れる。日本語の掉尾文に対して散列文といい、主要の部分が先に出てくる為、読んで明快、関係も極めて明瞭である。

- ex.4 われわれは、いずれの国家も、自国のことに……各国の責務であると信ずる
- ⇒ We believe that…(我々は信ずる…)〈平和憲法前文〉

◎日本語の文は、辞によって詞が包みこまれていく、ふろしき型統一の構造

語のうちの区別として、話し手の気持ちやむき出しに伝えるもの(辞)と、一度その内容が客観化されて和らげられたもの(詞)とがある。

詞→概念化の過程を経た語 辞→概念化の過程を経ない語



◎日本人は接続語ぎらい⇒代名詞、修飾句による接続

日本人が文の接続を表す語を使いたがらないのは角のたたない言い方を好むということに、一因があるようだ。従ってこういった理詰めの接続語をできるだけ角のたたない接続語に置き換えようとする。ex.5 「それゆえ」「そこで」「それだから」「それから」「それにもかかわらず」これをみてわかるように、特に文の結び付きに代名詞の果たす役割は大きいといえる。中でも英訳困難なことからア系の指示代名詞は日本語に独特のものらしい。

◎論理で重要な「すべて」と「ある」(全称と特称)

この種の語を使った不用意な言い廻しは、すぐ論理的につじつまが合わなくなる危険性を、持っている。ex.6 「クジラは魚ではない」→「クジラといわれるものは、すべて魚といわれるものでない」ex.7 「日本脳炎の患者が出た」→「ある人は日本脳炎にかかった」(後に登場する³品定め文には、分類の動きをもつことから「すべての」とか

「あらゆる」等の語が隠されていると考えられる。そこで、隠された「すべての」が、どの程度、どの範囲のものか、たえず気を配る必要がある。

◎論理に不都合な二重否定

これは、「は」と「が」の用法その他に関連して面倒な問題を生みやすいが、私達は日常「これによって肯定にないニュアンスを楽しんでいる。

- ex.8 「晴れていないことはない」「おもしろいといえないこともない」

二重否定の場合、形のうえからいって、形容詞としての「ない」のかかり方が大きいことに注意すべきである。また ex.9 「交野に行くには、地下鉄、バスともに便利ではない」といった表現の場合、「ともに」を特に強く否定するならば²地下鉄は便利、他方は不便、か、³地下鉄は不便、他方は便利、かのどちらかの意となるが、これが「便利だ」ということの否定だと、⁴両方ともに不便、の意となる。つまり否定は、それが特にどの語を否定しているかに関係している。特に日本語では、似ていないような表現が、助詞というただ一字の語の使い方によって出てくるのが特徴である。

エ.論理的表現「は」と「が」…日本語の文法構造の特色をある程度述べてきたところで、まとめの意味も兼ねて、日本語文法の要点のひとつともいえる「は」及び「が」について入っていきたいと思う。

「は」と「が」の名称と役割	
(は) ⇒ 係助詞(語と語の関係は放任) 中心点を示し主格を示すだけではない → 有効で便利な主題の提示 一つの文に止まらず文章にまとまりを与える → 修飾語という形での必然的形態 話を持って一定の範囲に限定する → 変形「には」「では」「としては」	[が] ⇒ 格助詞(関係に一種の規定を導入) 主格や対象語格にかぎるのは困難 話のきっかけを与える(副主題の提示) 話を限定して、行なわれる枠を与える 一定の状況に結びついた特定のものを表す ex. 「私 ^② 犯人です」と自首した → 「私 ^③ 」に置き換えることはできない。

◎品定め文と物語り文|言い立て文…話し手が何かについて判断し、それについて語る文)

- 1) イヌ^①動物だ。イヌ^②走る一品定め文種類分け、性状の規定などに関係
- 2) イヌ^③きた。イヌ^④走る一物語り文—ある状況で行なわれていることを物語る品定め文◀ 題目をあげてその題目のもとに叙述をする

イヌは動物だ…イヌを「動物」に分類 } 分類・分けを表わす用法と
私は星野です…被指示体と「星野」のさすものが同じ人 } 同一関係を示す用法とがある。

物語り文◀ 題目なしに叙述だけをする

話が具体的な一定の状況で行なわれていることを予想している。

「イヌは走る」 イヌというものは走る、つまり、時 にかかわらず成立する分類的用法	「イヌが走る」 一匹のイヌが走っている光景を 連想させる	限定 ①…遠く及ぶ ②…はより 範囲がせいまい
○ 話題の提示〜ゆるい仕方		○ さらに強い限定を加える

言い立て文から、「は」による二つの文の分類まで、これは全て佐久間鼎博士によるものであるが、博士の日本語言語理論によると、動詞から提題の助詞に至るまで、極めて日本語の論理的性格についての著しい特色を認めることができると書かれている。

西洋で発達した形式論理学では

馬が走る→一つの判断をあらわしたの→改めて論じる⇒馬は走るものなりと妙なことをやっているという。ところが日本語では1)と2)のちがいがはっきりしている。判断を表す というべきものは1)のセンテンスのみである。こんなことから佐久間博士は日本語をヨーロッパ諸語以上に論理的言語だと考えていいと言った。もし哲学者の母国語が日本語だったら、ヨーロッパ論理学は、まわり道せずにすんだかもしれない…ということになる。

IV 結論・総括

ここでまず③—アを対象とするわけだが最初に述べたように、この研究テーマで書かれた文献とはそう多くない。そういった文献の中では、一般に非論理的（つまりいつていることのすじ道がはっきりしていない）であるといわれる日本語に対して、ほとんどといってよいほど強い否定をしている。その点は互いに共通していたが、私の採用した論例（個人的主張）の考察によると主にその理由が四つの傾向に分かれているということだ。

①一つの言語において論理的という定義は、有り得ないのだから、日本語が他の言語と比べ論理的でないというのは無価値な主張である。②各々の文法体系から他の言語と比べ、その上で否定したもの ③決して言語自身が非論理的なのではなく、それは日本人の姿勢、習慣により云われているものである ④言語はそれ自身論理である。

どれが正しいか、今の所断定することはできないのだが、私の研究の結果としては、4つの中では、③が一番有力な説のように感じる。

つまり、一般に非論理的であるというのは前に述べてきた〔主語の影が非常に薄い〕〔文末決定制〕〔接続語ぎらいの傾向〕〔二重否定の存在〕などにみられる古くからの日本人の論理的言語に対する意識の低さ、角のたたない言い方を好むというような習慣的姿勢によるものであり（③—イ、〇〇さんの言葉じゃないがといったあの類の表現も結局は、意図がわからないというような印象を相手に与えるためのものであった）、これは決して日本語＝非論理的だとはいえないはずなのである。そして日本語が論理的言語であるということも明確に表示しているのが紛れもなく「は」と「が」であり、品定め文と物語文なのである。

ただ、文末決定制にしても、今まで日本人が無抵抗にそれに従ってきたわけではなく、詩歌などに見られるその傾向（倒置に対する我々の印象がほとんど消えかけている）は決して無視できないものといえる。日常の会話にしても同様である。私達が今日本語を見つめ直し、こういった傾向を強めていけば、この悲願も夢ではないのである。「は」…。西洋文法には到底見られない高級な文法手段でありながら、それが故にこれをこなすこ

とは容易なことではなく、その用法を法則化することがひどく遅れているとあった。

社会の実質的变化に応じて新しい文章観を代表するような模範的な文体を創り上げる努力もまた、必要とされる。私達日本人がまず論理のごまかしを嫌い、論理的に考えることを尊重し、それを正確に表現することの努力をするようになったとき、初めて日本語は非論理的だなどといわれなくなるのではないだろうか。また私達日本人一人一人が、普段何気なく使用している日本語という言語に対してもっと愛着を持ち、誇りを持たなければならぬと感じた。論理的将来性を約束されてはいても、それを実際に築くのは、日本語を使用している私達なのである。

V 反省・感想

テーマ設定を決めた時には、どのようなものになるか見当もつかなかったが、始めると面白くて研究のとりこになってしまった。参考になるものは文献のみなので、なるべくなら抜粋的にまとめていきたいはなかったが、その所はやはりある程度仕方がないと思う。結局、最後までこの研究を支えてくれたものは、自分自身の「日本語は非論理的じゃない」という心の中の主張ではなかったらどうかと今、考えてみて、そう思う。

参考文献

- 大出 晃 「日本語と論理」講談社現代新書。
- 板坂 元 「日本人の論理構造」講談社現代新書
- 沢田允茂 「考え方と論理」講談社学術文庫
- 三上 章 「日本語の論理ハとガ」くろしお出版
- 金田一春彦 「日本語」岩波新書
- 佐久間鼎 「日本語の言語理論」厚生閣版（絶版）
- 野本菊雄 「日本人と日本語」筑摩書房
- 林 大監修 「図説日本語」角川書店。